

慣用句とことわざ

慣用句とは、二つ以上の言葉が組み合わせられて、ある意味を表す、決まった言い回しのこと。ことわざとは、昔から言い伝えられてきた、教えや知恵などを表す短い文のことです。慣用句やことわざは、会話や本などの中でたくさん使われています。また、自分が話したり書いたりするときに使くと、表現が豊かになります。いくつ覚えられるか、ちょう戦してみましよう。



慣用句

からだ ぶぶん はい 体の部分が入っているもの

- 【頭が固い】その場に合せて考えが変えられない。
【頭を冷やす】冷静になる。
【顔にどろをぬる】名譽を傷つけ、はじをかかせる。
【合わせる顔がない】申し訳なくて、その人と会うのがつらい。
【面の皮が厚い】ずうずうしい。
【大目に見る】失敗をあまりとがめない。
【白い目で見る】にくしみや疑いをこめた目で見ると。
【目からうろこが落ちる】あることがきっかけで、物事が急に関わる。
【目と鼻の先】すぐ近く。
【目鼻がつく】だいたいの見通しがつく。
【鼻が高い】じまんと思う。
【鼻にかける】得意になり、じまんする。
【寝耳に水】思いがけない知らせにおどろく。
【耳にたこができる】同じことを何度も言われて、いやになる。
【開いた口がふさがらない】あきれすぎて、何も言えない。
【口を酸っぱくする】何度も同じことを言ってきたせいで。
【あこで使う】いばって人に指図し仕事をさせる。
【歯が立たない】相手が強すぎてまったくかなわない。
【のどから手が出る】欲しくてたまらない。
【首を長くする】とても期待して待つ。
【首をつっこむ】興味を持って何かにかかわる。
【かたが持つ】味方する。
【胸を貸す】強い者が弱者の相手をしてやる。
【胸をなで下ろす】心配がなくなり、ほっと安心する。

からだ ぶぶん はい 体の部分が入っているもの
慣用句には、体の部分が入っているものが、とても多いよ!

あひく あひく あひく
張子とは、紙をはり合わせた、中が空の細工のことで、とても軽い。

慣用句

からだ ぶぶん はい 体の部分が入っているもの

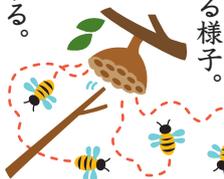
- 【背に腹は代えられない】大事なため他をあきらめても仕方がない。
【腹が黒い】心の中では悪いことを考えている。
【へそを曲げる】きげんを悪くする。
【へそで茶をわかす】ばかばかしくて、おかしい。
【こしをぬかす】とてもおどろき、立てなくなる。
【話のこしを折る】相手の話の途中で、じやまをする。
【しり馬に乗る】人につられて考えなしに行動する。
【うでが立つ】技や力がすぐれている。
【うでが鳴る】実力を発揮するのを楽しみにしている。
【赤子の手をひねる】簡単に負かす。
【かゆいところに手が届く】すみずみまで気配りされている。
【手のひらを返す】人に対する態度を急に変える。
【手も足も出ない】まったくどうすることもできない。
【指をくわえる】うらやみつつ、何もできない。
【足が棒になる】長く歩いたりして、足がつかれる。
【足を洗う】悪行をやめてまっとうになる。
【骨を折る】苦労して(人のために)努力する。
【猿真似】何の考えもなしに他人の真似をすること。
【飼犬に手をかまれる】世話をした人に裏切られる。
【犬猿の仲】とても仲が悪いこと。
【馬が合う】よく気が合うこと。
【猫も杓子も】誰でも。何もかも。
【虎の子】大事にとってある物。
【張り子の虎】見かけだけでえらぶって、実力のない人。
【狐につままれる】わけがわからず、ぼかんとする。



慣用句

むし おに はい 虫や鬼などが入っているもの

- 【狸寝入り】寝たふり。
【いたちごっこ】同じことのくり返して解決しないこと。
【袋の鼠】逃げ場がないこと。
【鵜呑みにする】人の言葉をよく考えずそのまま信じる。
【おうむ返し】人の言葉をそのまま言い返すこと。
【雀の涙】とても少ないこと。
【烏合の衆】まとまりのない人の寄せ集め。
【長蛇の列】とても長い行列。
【蜘蛛の子を散らす】集団が一齐に散らばる様子。
【しり切れとんぼ】物事が途中で終わってしまうこと。
【蜂の巣をついたよう】大きなきになる様子。
【虫がいい】身勝手に、ずうずうしい。
【虫の居どころが悪い】きげんが悪い。
【天狗になる】うぬぼれる。
【心を鬼にする】相手のために厳しくする。
【うどの大木】体ばかり大きくて、役立たずな者。
【話の花が咲く】様々な楽しい話題で、話がはずむこと。
【根に持つ】いつまでもうらみを忘れないこと。
【根ほり葉ほり】細かいところまでしつこく。
【一から十まで】最初から最後まで。
【四の五の言う】なんだかんだと文句を言う。
【万事休す】もう何もしようがなく終わりでである。
【赤の他人】まったく関わりのない人。
【白を切る】知っているのに、知らないふりをする。
【白黒をつける】良い悪いなどをはっきりさせる。



【頭かくして尻かくさず】悪事や欠点をかくしたつもりで、かくしきれしていないこと。

【暑さ寒さも彼岸まで】夏の暑さ、冬の寒さは彼岸（秋分・春分の頃）までにはやわらかく。

【雨降つて地固まる】もめごとの後には、かえって物事がうまくいく。

【案ずるより産むが易し】心配していても、実際やってみると意外にうまくいくものだ。

【石橋をたたいて渡る】用心の上に用心を重ねて、慎重に行動すること。

【急がば回れ】早く目的地に着くには、危険な近道より遠回りでも確実な道を通る方がよい。

【一寸の虫にも五分の魂】小さくて弱い者にも意地があるから、あなどつてはいけない。

【言わぬが花】よけいなことは口に出して言わない方がよい。

【馬の耳に念仏】いくら意見や忠告をしても、まったく耳を貸さず効果がない。

【海老で鯛を釣る】わずかな元手で大きな利益を得ること。

【鬼に金棒】もともと強い者が、何かを得てさらに強くなること。

【鬼の目にも涙】いつもはこわくて冷たい人でも、優しい感情を表すことがある。

【溺れる者はわらをもつかむ】とても困っている人は、役に立たない物にでもすがろうとする。

【風が吹けばおけ屋がもうかる】ある出来事が、めぐりめぐって意外な所に影響すること。

【かべに耳あり障子に目あり】秘密はもれやすいものだから、注意したほうがよい。

【亀の甲より年の功】年長者が、その長い人生で身につけた知恵は貴重なものだ。

【枯れ木も山のにぎわい】つまらないものでも、ないよりはあったほうがましだ。

【木を見て森を見ず】細かい部分ばかりに注目すると、全体が見えなくなる。

【腐つても鯛】優れたものは、少し悪くなってもそれなりの価値がある。

【口はわざわいのもの】話したことが災いをまねくこともあるから、発言は慎重にせよ。

【芸は身を助ける】身につけた技能が、いざという時に暮らしの役に立つ。

【光陰矢のごとし】月日がたつのはとても速いから、時間を無駄にしてはいけない。

【弘法筆を選ばず】優れた人は、道具の良し悪しに文句をつけない。

【転ばぬ先の杖】失敗しないように、あらかじめ十分に準備し用心すること。

【猿も木から落ちる】どんなに優れた人でも、時には失敗することがあるものだ。

【山椒は小粒でもびりりと辛い】小さくても能力があれば、ばかにできないということ。

【三人寄れば文殊の知恵】普通の人でも三人で考えれば、すばらしい知恵がでる。

【蛇の道は蛇】同類のすることは、同じ仲間にはすぐにわかるものだ。

【立つ鳥跡をにごさず】立ち去る時は、きれいに後始末をするべきだ。



【月とすっぽん】共通点はあるけれど、非常に差があるもの。

【鉄は熱いうちに打て】若くて柔軟なうち、または情熱があるうちに鍛えよということ。

【出る杭は打たれる】目立つ人や、出しゃばる人は、周りから非難されたりするものだ。

【灯台下暗し】身近なことほど、意外とわかりにくいものだ。

【取らぬ狸の皮算用】手に入るか不確かな物をあてにして計画を立てること。

【飛んで火にいる夏の虫】自分から進んで災難へ飛びこむ様子。

【泣きつ面に蜂】悪いことや、不運が重なって起こること。

【情けは人のためならず】人への親切は、相手だけでなく自分のためにもなるということ。

【七転び八起き】何回失敗しても諦めずにまた立ち上がる戦うこと。

【逃がした魚は大きい】手に入れて失ったものは、実際より価値があるように思える。

【二兎を追う者は一兎をも得ず】二つのことを同時にやろうとすると、どちらも失敗する。

【猫に小判】価値がわからない者に、貴重なものを与えても無意味である。

【能ある鷹は爪を隠す】優れた能力を持つ者は、それをむやみに見せつたりしないものだ。

【のと元過ぎれば熱さ忘れる】苦しいことが過ぎると、苦しさや恩をすぐに忘れてしまう。

【花よりだんご】美しさより、役に立つかどうかの方が大事だということ。

【人の口には戸は立てられない】世間のうわさ話は止めることができない。

【火のない所に煙は立たぬ】うわさをされるのは何か原因があるからである。

【ひょうたんから駒が出る】思いがけない意外なことが起こる。冗談が現実になる。

【下手の横好き】下手なくせに、そのことをするのが好きで熱心なこと。

【下手の横好き】下手なくせに、そのことをするのが好きで熱心なこと。

【蛇にいらまれた蛙】恐ろしいもの、苦手なものの前で、身がすくんで動けない様子。

【仏の顔も三度まで】どんなに優しい人でも、何度かひどいことをされれば怒るということ。

【柳の下にいつもどじょうはいない】一度うまくいっても、次もうまくいくとはかぎらない。

【やぶをつついて蛇を出す】余計なことをしてかえって悪結果をまねくこと。

【病は気から】病気は気持ちの持ち方で、良くも悪くもなるということ。

【馬子にも衣装】どんな人でも身なりを整えれば立派に見えるということ。

【目は口ほどに物を言う】口で言わなくても目の表情だけで、気持ちが伝わるものだ。

【餅は餅屋】何事も専門家に任せるのが一番よいということのたとえ。

【門前の小僧習わぬ経を読む】いつも見聞きしていると、いつのまにか覚えてしまうこと。

【論より証拠】あれこれ議論するより、証拠を見せる方が、物事を明確にできる。

【笑う門には福来る】いつも笑っている人の家には、自然に幸せが訪れる。

